

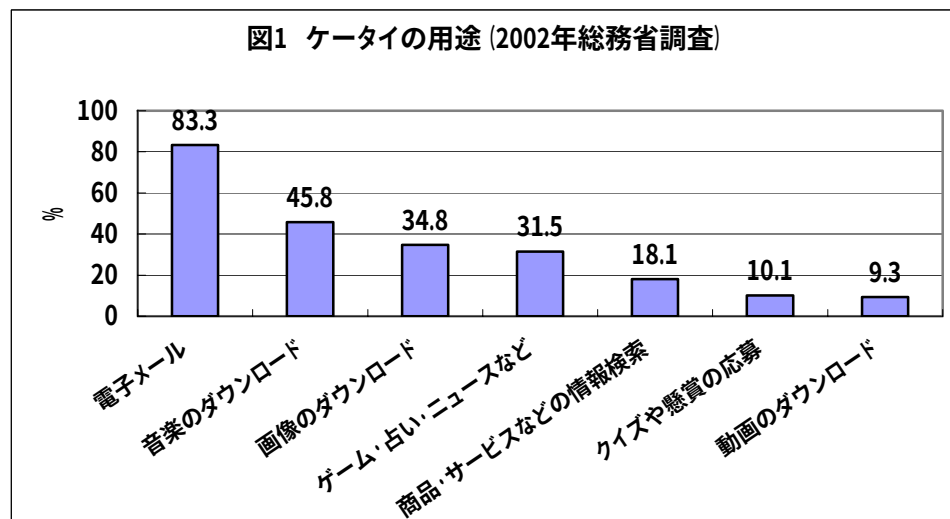
携帯電話と若者文化

①携帯電話の「現状」

＊「拡張する」身体：自動車・パソコン・ケータイ etc.

→生身の身体だけでなく、テクノロジーの一部が「欠かせないもの」と化す

→電話以外の付属機能（インターネット（メールも含む）・着メロ・モバイルカメラ）は日本が先導したものといわれている→現在も世界をリードしている（図1）



＊日本における携帯電話の発達：若者文化との密接な関連

⇒特に若者にとって携帯電話（ケータイ）は「必須の」アイテムとなっている。

→若年世代ほど多様な機能を使いこなしている

⇒ケータイメールの多用（図2）¹：発話コミュニケーションとともに文字コミュニケーションが重視される（むしろメールの方が重要？）

→ケータイメールは大学生にとって特に重要であるという指摘もある

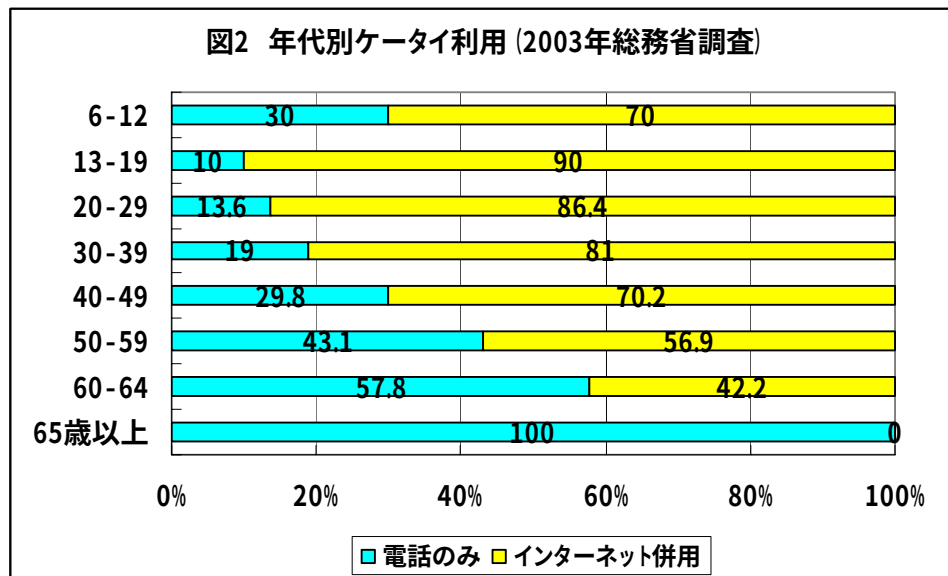
「大学に入ると、いじめを形成する純粋集団がなくなる代わりに、共在空間もなくなる。それゆえ大学に入ってケータイなどの共在構成メディアはより重要なものとなっていく」（松田他，2006:85）

→常に同じメンバーと顔を付き合わせる「鬱陶しさ」から「解放される」代わりに、「希薄な」人間関係の中で生活せざるを得ない状況にさらされる

⇔各種の調査結果は、ケータイメールの利用度が高い学生ほど、友人の数が多く、社交的で、自己開示性が高く、対人不安が少なく、孤独感が低い²（松田他，2006:19）

¹ 原因としては、料金の安さ（メールの方が通話に比べて割安感がある）も重要である。この他、携帯電話に先立って若者たちに流行したポケットベルの存在があったことも重要であったとの指摘もある。

² 「ケータイメールの使用頻度の高い人ほど、外交的で対面関係が活発、友人も多く、深い人間関係を好み、孤独感も少ない」を示す一方で、孤独に対する恐怖感や孤独に耐える力の欠如もみられるとしている。その上で、ケータイメールにおけるコンビニ人間関係（相手の事情を気にせず、24時間、好きなときにコンタクトを取れる）に慣れてしまうと、孤独耐性がなくなるのではないかとの危惧を示している」（松田他，2006:19）



＊ケータイ・ケータイメールの特徴：「いつでも使うことのできる」パーソナルな通信手段

→特にケータイメールは、即時にメッセージを伝えることができるのみならず、「音声通話ほどの押しつけがましさもなく」「『適当な距離感』を与えてくれるメディア」（松田他，2006:19）

→自分の都合でメールを送信するが、電話と違い、必ずしも即時に返事を返す必要もない³

→表2にあるように、ケータイメールは比較的近距离の相手との通信手段となっている

→一度に送信する文字数には実質的に限りがあるため、短文の利用が多くなる

→ケータイメールの送信は比較的親密な相手とのやり取りに限られる

⇒PCメールの場合は、比較的遠距離との交信に利用される

→SNS・ブログ・チャットなどの利用にみられるように、利用によって交流範囲が拡大する傾向

→仕事利用・浅い付き合いなど、社会関係の構築は比較的「開放的」になる

⇒20・30代では、2つのツールを使い分ける人が増えている

表2 メール送信相手の距離（2002年山梨県における調査）				
	両メール使用		ケータイメールのみ	PCメールのみ
	ケータイメール	PCメール		
一緒に住んでいる	19.1	11.5	18.1	0
車で10分以内	12.7	4.9	13.5	3.8
車で1時間以内	42.7	39.3	46.8	34.6
車で5時間以内	19.7	34.4	18.1	38.5
車で5時間以上	5.1	4.9	2.9	15.4
海外	0.6	4.9	0.6	7.7

②hot な関係から warm な関係へ

＊現代的な「やさしさ」の意味するもの

→「かれらの“やさしさ”は、“一見やさしい”人や“やさしそー”な人、“優しい感じ”の人をも含む『集団』との『協調』を目指していた」（大平，1995）⇒全共闘的なやさしさ＝「連帯」⁴

³ その一方で、すぐに返事を返すことが「礼儀」とも考えられている。

⁴ この観点からは、社会的弱者（日雇い労働者・公害被害者・ベトナムの人々・諸外国の学生 etc.）との連帯という志向性が生まれ、それゆえに、相手の気持ちを察する「共感」が重要になるが、今日的なやさしさには、むしろ共感は絶対不可侵である他者の領域の侵害とみなされる。

hot なやさしさ：相手に同情したり、一体感を持ったりするもの。熱血主義。

warm なやさしさ：「相手の気持ちに踏み込んでいかぬように気をつけながら、すべらかで暖かい関係を保ってこうとする」。

→人間関係で自分が傷つかないこと、その裏返しとして相手を傷つけないことが重要なこととなる。

→個人の人生観に関わるような事柄に対しては触れられたくないし触れない。

⇒お互いを傷つけないやさしさ⁵

相手への「過剰な」思いやり⇒傷つくことにきわめて敏感な若者たち

拒絶されることも、拒絶することも極度に恐れている

→この点においてケータイメールは非常にフィットする

「相手が自由に返事を選択できるし、言い訳の余地も与える」

⇒若者の間で特に多用される「絵文字」

『「文字だけでは伝わりにくい感情をより適切に伝えるため」だけでも、『絵文字を入れてメッセージをかわいくしたい』からだけでもなく、『絵文字を入れないと、怒っていると誤解される』という対人関係に関する配慮もはたらいている」

→かれらなりの深い配慮が新たな文化を形成している

⇔このような論理からは、異質の個人同士の結びつきは生まれにくい

⇒自らの感性にフィットするものだけで周りを囲もうとする発想が蔓延する

⇒タコソボ化・島宇宙化の進展

③島宇宙化の行き着く先 —文化志向から関係嗜好へ—

戦前から 1950 年代：世代を超越した共通コードの存在と「秩序への信頼」 (ex.手塚治虫)

1960 年代から 1972 年：<秩序>への疑念・「サブカルチャー」としての若者文化の出現

→「「若者／大人」という共通コードに基づくコミュニケーションが一般化」。

→疎外するもの＝「社会」＝大人⇔疎外されるもの＝「個人」＝若者

→疎外されるものとして共同性が成立 (ex.梶原一騎)

1960 年代若者文化の特徴：対抗性と下位性

→既存の文化に対する反発（対抗性）と、既存の文化との差異化（下位性）

⇔革命幻想の終焉にともなう対抗性が失われるとともに、若者文化さえも、後続の世代にとっては「既存の文化」とみなされる。

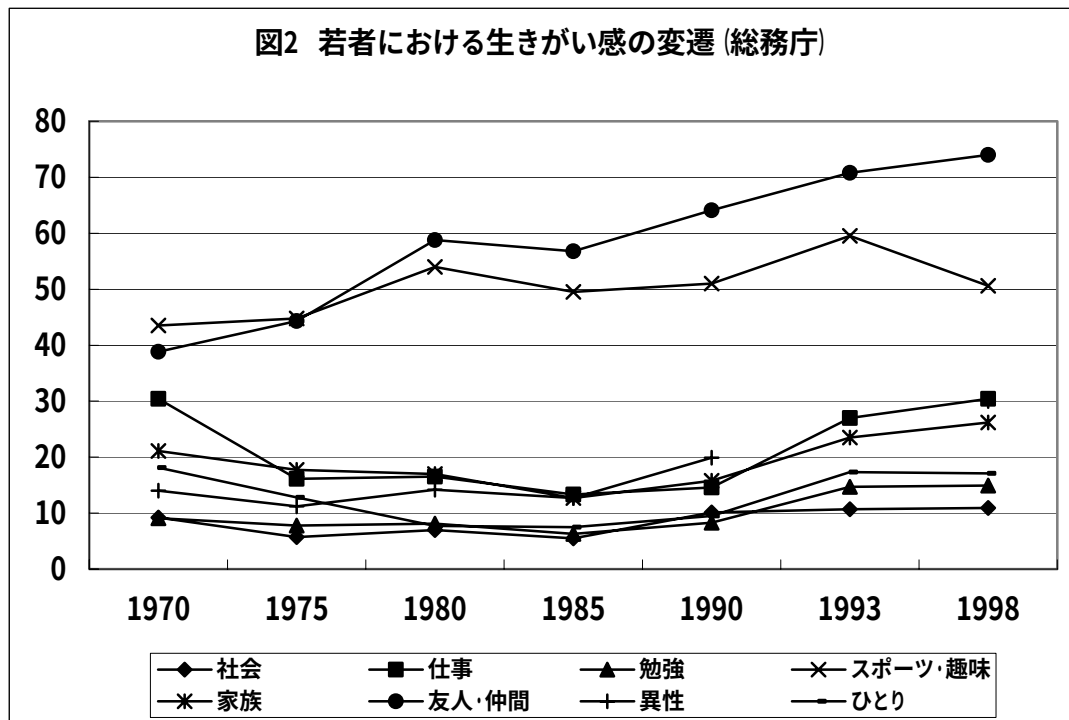
⇔新人類文化が社会全体に蔓延していく一方で、他者の視線を気にしながら記号的差異化を脅迫的に繰り広げることに倦み疲れ、ある種の脱力感を持って身近な関係性へと閉じこもる、新たなタイプの若者たちが登場するようになる。

→統一的な若者文化における下位性の喪失→若者文化の細分化

→新人類世代では、若者文化としての共通コードが失われるが、その反面、「こぞって記号的差異化競争に参加することで世代的なつながりを保っていた」⁶

⁵ こうした論理は、鉄道やバスなどで初老の人に席を譲るべきかどうかの選択の時にも、独特の形で現れる。つまり、自分は若いと思っているかもしれない人に対して、席を譲るという行為は失礼に当たる、だから、寝たふりをしたり、無視したりするのである。

⁶ DC ブランドに身を包んで六本木を闊歩した若者や、秋葉原周辺に集結したいわゆる「オタク」と呼ばれたような若者たちは、その典型的な例であったといえる。差異化の方向性は多用であり、ファッション・音楽・マンガ・娯楽空間などさまざまであった。矛盾した表現になるが、互いを否定すると同時に、全共闘的なものを否定することによってかれらは若者としての統一感を得ることができたということである。全共闘世代にとっては大人という共通の敵が存在していたが、新人類世代においては、全共闘世代が敵となり、分断化された同世代の若者たちが敵となっていた。



⇔「これに対して、団塊ジュニア世代が主役となる 1990 年代の若者たちの世界においては、彼らと大人たちとを区別する手立てはもはやなく、また 80 年代のように、多様な象徴的領域のうちの 1 つ（あるいはそのうちのいくつか）に執着することで、アイデンティティの根源を確かめるというような姿も見られない。」

⇒「共通の文化を前提とすることができない以上、自己防御のために深いコミュニケーションの回避がなされる」。

⇔「しかしながら注意すべきは、実はここにおいてコミュニケーションそれ自体が忌避されているわけでは決してないという点だ。現代の若者たちが社会関係全般から撤退しているとするのは、単なる偏見に過ぎない。むしろかれらは、かつての若者たちと同じか、あるいはそれ以上に、他者との関係性を大事にしている」。

⇔共通の文化的基盤を持たない現代の若者の人間関係は、きわめて身近な範囲にそのひろがり限定されてしまう傾向にある。

現代日本の若者たちは、親密さや安心感を希求する一方で、関係性にともなう心理的負担を忌避する傾向が強いため、なかなか他者のプライバシー（生き方に直接触れる部分）に介入したがるらない」。

⇒浅薄な親密性・個人の領域の重視

→若者におけるケータイ・ケータイメールの「必須化」は、このような現象の象徴とも見ることができる。

参考文献

- ・大平健, 1995, 『やさしさの精神病理』 岩波新書.
- ・松田美佐/岡部大介/伊藤瑞子編, 2006, 『ケータイのある風景 テクノロジーの日常化を考える』 北大路書房.
- ・宮台真司/石原英樹/大塚明子, 1993, 『サブカルチャー神話解体 少女・音楽・マンガ・性の 30 年とコミュニケーションの現在』 パルコ出版.
- ・山田真茂留, 2000, 「若者文化の析出と融解 文化志向の終焉と関係嗜好の高揚」, 宮島喬編, 『講座社会学 7 文化』 東京大学出版会, pp.21-56.